歴代オリンピック名場面における
実況アナウンスの成功要因

トップスポーツマネジメントコース
5020A304-7　伊藤　隆佑　　研究指導教員：平田　竹男 教授

Ⅰ．背景

1964 年東京五輪開会式での「世界中の青空を、全部東京に持ってきてしまったような素晴らしい秋日和でございます」、2004 年アテネ五輪体操男子団体での「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ」など、歴史に残るスポーツの名場面は、実況アナウンサーの声と共に記憶に刻まれてきた。

五輪放送は NHK と民放合同のジャパン・コンソーシアム（JC）が行うが、筆者は TBS アナウンサーとして 2016 年リオ、2018 年ピョンチャンと２度、JC での実況を担当した。それらの内容が「分かりやすい」「丁寧」と評価された一方、「喋り過ぎ」「不勉強」等の御意見も頂いた。そこで 2021 年東京五輪で視聴者に最良の放送を届けるために、歴代五輪を実況した各局の先輩アナウンサーにヒントを得たいと考えた。

スポーツ実況に関する先行研究は、アナウンサーの役割を「分析」「予測」等に分類した山本（2003）、金メダル場面の言葉を定量的に検証して「描写」の特徴を示した山内（2009）などが存在する。しかし、当事者の立場で複数の知見を集め、実況のノウハウや構造を検証した研究はあまり見られない。

Ⅱ．目的

本研究は、歴代五輪の名場面における事前と本番の留意点、実況アナウンスの成功要因を明らかにすることを目的とする。

Ⅲ．方法

１．インタビュー研究

1) 対象：五輪のメダルや世界新記録の実況アナウンサーや表彰の受賞歴などの高度な技能を持つ人物とした（表 1）。

2) 方法：五輪や世界記録等が懸かる局面の事前準備と本番実践における留意点をインタビューガイドに、半構造化インタビューを行った。故人など直接面談できなかった対象についてはインタビューに答えている放送や講演の発言などをテキストに文字起こしして分析データとした。

3) 分析：調査のデータを“逐語録”として、研究者自身が発言の内容を深く理解するまで熟読し、事前準備と本番実践の具体例を整理した。特に、本番実践のノウハウが先行研究にある「現在の描写」「過去の分析」「未来の予測」のどこに該当するか筆者の経験をもとに分類した。その上で、M-GTA を参考に対象者の発言から共通するキーワードを抽出し、そのキーワードを用いて「描写」「分析」「予測」を定義付けることで論の補強を行った。

表１　インタビュー対象者の属性（*放送・講演時）

方法	所属	氏名	年齢	主な五輪	主な担当
インタビュー	ニッポン放送	枇杷阪 明	87 歳	1964 年	開会式、体操
	文化放送	月岡 逸弥	78 歳	1976 年	レスリング、柔道
	TBS	石川 顕	79 歳	1984 年	ボクシング、野球
	TBS	林 正浩	64 歳	1992 年	野球、陸上
	NHK	刈屋 富士雄	60 歳	2004 年	体操、フィギュアスケート
	民放テレビ	A（現職）	50 代	2000 年代	レスリング
放送等	NHK	北出 清五郎	*68 歳	1964 年	開会式、スキー
	NHK	鈴木 文彌	*66 歳	1964 年	開会式、バレーボール
	TBS	渡辺 謙太郎	*72 歳	1972 年	開会式、陸上、柔道
	NHK	太田 雅英	*39 歳	2016 年	レスリング

Ⅳ．結果

１．事前準備と本番実践の具体例

6 名のインタビューから共同放送する他社アナウンサーに教示を得たなど、通常とは違う準備と実践が示された（表 2）。

表２　事前準備と本番実践に関する主な発言

氏名	インタビューでの発言
枇杷阪 明	“NHK に電話しまして鈴木文彌さんに（中略）「来いよ、教えてあげる」って”
月岡 逸弥	“記録が懸かってる時に、特にどういう実況をすべきなのか（意見交換した）”
石川 顕	“（睡眠時間や食事等）1 か月前くらいから（中略）コンディション整えました”
林 正浩	“色んな人の実況をね、横で聞く（中略）だから、そういう風に身になった”
刈屋 富士雄	“五輪のメダルが懸かった時に（精神面など）もうピークを持ってくる”
A（現職）	“（五輪は）メダルを獲ってくれればいいという、一番シンプルな構図かな”

２．描写・分析・予測

10 名の調査でスポーツ実況の手法や組み立て等、「描写」「分析」「予測」についての回答が得られた（表 3～表 5）。

表３　「描写」に関する主な発言

氏名	インタビューでの発言
枇杷阪 明	“（開会式の入場行進リハーサルで）「遅れてるぞ」って描写が（中略）難しかった”
月岡 逸弥	“（長嶋選手の引退試合で）しーんとなることが、まあなんていうかな場内描写”
石川 顕	“凄いっていうのを連発したのを、なんか他の言葉で変えなきゃいけないなって”
林 正浩	“（目の前の出来事を）喋れないんじゃなくて、喋らないというか、喋らない黙り”
刈屋 富士雄	“伝わるんであれば黙ってもいい（中略）荒川静香さんの演技は後半の２分は黙った”
A（現職）	“見える部分と、見えても触れるべき部分（中略）その辺の言葉数の調整”
北出 清五郎	“（一挙手一投足は）テレビの場合には見て分かるから、それは一切言う必要ない”
鈴木 文彌	“言葉の数を増やさないと（中略）あぁ綺麗な青空だ、だけじゃいけないわけ”
渡辺 謙太郎	“その場面にもっとも適した言葉づかい語句をいかに多く持ち合わせているか”
太田 雅英	“パフォーマンスを瞬間的にどう表現するか、それは表現力や瞬発力のようなもの”

表４　「分析」に関する主な発言

氏名	インタビューでの発言
枇杷阪 明	“（王選手の HR の）新記録が出た時には、その場所とそれから何月何日”
月岡 逸弥	“実況するアナウンサーは、違うことを探そう違うものを観ようって思う気持ち”
石川 顕	“視聴者はアナウンサーの実況に「そうだそうだそうだ」っていう気持ちで見てる”
林 正浩	“歴史は繰り返すって言うからカール・ルイスみたいな走り方とか跳び方する選手”
刈屋 富士雄	“見てる人が共鳴する一言っていうことが、たぶん『伝わる』っていう事のひとつ”
A（現職）	“五輪も近づくと取材する機会もなかなかないしね、その辺ちょっと難しい”
北出 清五郎	“2 人の対戦は、過去はどうだったとか（中略）裏付けをぐっと盛り上げた”
鈴木 文彌	“右目で 1 塁、左目で 3 塁、アナウンサーは広角レンズを持たなきゃ”
渡辺 謙太郎	“（競技の）奥行きを探る水先案内人の役割をつとめてファンの期待に（応える）”
太田 雅英	“分析も結構大事なので（中略）押し付けるというより（中略）感じてもらえれば”

表５　「予測」に関する主な発言

氏名	インタビューでの発言
枇杷阪 明	“アナウンサーってのは、やっぱり個人プレーですよね、喋りでしたら”
月岡 逸弥	“現場にいる人じゃないと分からない、肌感覚みたいなものをどうやって”
石川 顕	“この試合でノックアウトがないはずがないと（中略）断言できちゃう”
林 正浩	“（WBC で）イチローが（中略）どんなファウルの打ち方してたとか”
刈屋 富士雄	“自分で分かるかどうか（中略）目が持てるかどうかがもう一番、生命線”
A（現職）	“基本は会話だと思うんですね、いかに解説の方と会話するかという所”
北出 清五郎	“（快晴の開会式に）こんなに嬉しい事はございませんと、そういう言葉も出た”
鈴木 文彌	“聖火台の右側にすっと立って手を挙げます（中略）何回やっても 55 秒”
渡辺 謙太郎	“遠慮なくモノを言わせてもらうことでもある。即ち主観の表現・主張”
太田 雅英	“プレイヤーが何をするのかを楽しむのはどこかというと、その前の予測”

3．キーワード

インタビューで 3 人以上が語った共通点から、M-GTA を参考に、描写で 3 つ、分析で 5 つ、予測で 5 つ、計 13 個のキーワードを抽出して、それぞれの定義付けを行った（表 6）。

表 6　キーワードの分類と定義、主な発言

要素	キーワード	定義	発言
描写	語彙力	言葉の言い換えや置き換えのほか 比喩などを用いて豊かな表現をする言語力	“ホームランのシーンでも表現が全然違って” “10 万語ないと表現できない”
	反射神経	選手の動作や事象の変化に対して 遅滞なく言語化できる身体的能力	“見た瞬間にそれを正確に伝える” “反射神経のところなんだよね”
	沈黙	目の前の事象を喋らず、見せて、聞かせて 効果的な演出として活用できるもの	“アンパイアにストライクって言わせよう” “喋らなくても伝わる”
分析	歴史	時代ごとの放送の特徴や言葉の変化 競技や選手の変遷を知識として持つこと	“表現なんかも変わってきてると思う” “放送は試合を語ることに推移”
	視野	フィールド全体に広く目を配りつつ 何かを発見する意志を持って観察すること	“ベンチの後ろにね、王さんのご両親” “ただ眺めているのでは何もつかめない”
	多面的	放送に関わる役割分担を把握して 様々な視点から表現すること	“平面、平らなものじゃダメ” “いろんな角度から表現しよう”
	取材	視聴者が持ち合わせていないデータや 現場の最新情報を収集すること	“見てる人の方が知ってるわけよ” “足で放送をするんだっていう考え”
	共感	視聴者が自然と納得する表現によって 「そうか」「なるほど」と同調されること	“心に溢れてる言葉が人の心を打つ” “だよね、ブルシェンコだよねって”
予測	独自性	アナウンサーがそれぞれに持つ個別の 表現方法や、情報、着眼点のこと	“どなたの知恵も借りられるわけじゃない” “他の人が目をつけない所を喋る”
	主観	「こうではないか」という自分の考えや 経験をもとに生まれる意見や主張のこと	“演技の途中で金、決まるんじゃないか” “何よりも格闘技は見てきたという自信”
	会話	解説者とともに試合や競技のポイントを 解きほぐして視聴者を導くこと	“何を語らせるかというかに取り役” “解説の人にどう言ってもらおうか”
	面白さ	視聴者に選手の魅力や競技の醍醐味を 提示して放送を楽しんでもらうこと	“プレゼンテーションして見ていただく” “深いことを面白く伝えられるか”
	判断	視聴者に何を伝えるべきか取捨選択し 勝負の要点を正しい目で見極めること	“（視聴者が）何をしゃべってもらいたいか” “（視聴者が）その目が正しいって（思う）”

Ⅴ．考察

1．オリンピック実況

筆者の経験から五輪における実況アナウンサーの課題は、普段、自分が中継していない競技を担当する可能性があり新しい種目に関しての実況技能や習熟度が低いことである。

しかし、先人達は 1964 年東京五輪で鈴木氏が体操実況のノウハウを枇杷阪氏に共有したほか、1976 年モントリオール五輪で月岡氏がアナウンサー同士で実況の在り方を意見交換するなど、オール・ジャパンの体制で事前準備を行っていた。

また、本番実践に関して“最大公約数”“より丁寧に”等、通常と違う意識が確認された。これは、五輪中継があらゆる世代に視聴される地上波特性に合わせた配慮だと推察される。

2．実況の 3 要素

インタビューから抽出された 13 個のキーワードを用いて実況の「描写」「分析」「予測」について、以下に考察した。

1）描写

「描写」とは、眼前の事象を言語化する語彙力や反射神経、あるいは沈黙で伝えることだと考えられる。特に『沈黙』は、喋らずに伝える技能で『現在の描写』として実践されていた。例えば、観客の拍手、審判の声、スターターの号砲など試合会場でのリアルな音を活かす手法としての「描写」である。筆者にとって「描写」とは情景や動作を伝えるために“喋る”ことであった。ただ、映像技術が進化する現代のテレビにおいてはアナウンサーが“喋らない”こと、つまり、画面の表示を生かす等、『沈黙による描写』が有用だと示唆される。

実際に、こうした沈黙を含む実況の放送は、TBS 系列の JNN アナウンサー表彰で最高賞のグランダプレミオを獲得するなど優れたアナウンスメントとして現場でも評価された。

2）分析

「分析」とは、歴史を学び広い視野と多面的な取材により視聴者の共感を呼ぶような表現をすることだと考えられる。『共感』は、予め用意していない言葉や咄嗟の発言による『過去の分析』である。様々な視点から広角レンズで情報を収集することが、視聴者の心を打ち『共感を呼ぶ分析』へと繋がっていく。これは名場面を伝える上で重要な要素である。

3）予測

「予測」とは、独自性や主観を持ちながら解説との会話で面白さを提示し、正しい目で判断することだと考えられる。『判断』は、勝負の要点を見極める眼力のことで『未来の予測』を可能とする。その目があれば、決着の瞬間を逃さず伝えることができるとされたが、この『判断が生む予測』は五輪での経験など多様なキャリアから養われるものであろう。

3．沈黙・共感・判断

本研究で実況の「描写」「分析」「予測」の具体的内容が明示されたが、キーワードのうち 10 個は筆者も既知の技能だった。しかし、『沈黙』『共感』『判断』は新たな発見で、五輪でも実践された成功要因だと捉えることができる（図 1）。

なお、今回は過去の五輪等に注目した研究で人数や競技も限られていたため、継続的に検証を行うことが求められる。

図 1　実況の成功要因イメージ

Ⅵ．結論

五輪アナウンサーは通常時と異なる JC という特殊な環境にあっても卓越した準備と実践で名場面を伝えていた。まず、実況 3 要素である「描写」「分析」「予測」の原則を忠実に行うこと。さらに、描写では『沈黙』を用いて伝える、分析では視聴者の『共感』を呼ぶ表現をする、予測では正しい目による『判断』で一瞬を逃さないことである。このように、歴史に残るスポーツシーンは『沈黙』『共感』『判断』等の要因によって、人々の記憶に深く刻まれたと言えるだろう。以上のような先人の智慧と自己を照らし合わせながら研鑽を重ねることは五輪実況を担当する際にも一定の成果を生むと考えられる。今回の研究で、偉大な先輩方に多くの気付きを与えて頂いたことを財産として東京五輪の放送に携わりたい。